

余山貝塚における骨角貝器の生産

阿部 芳郎

はじめに

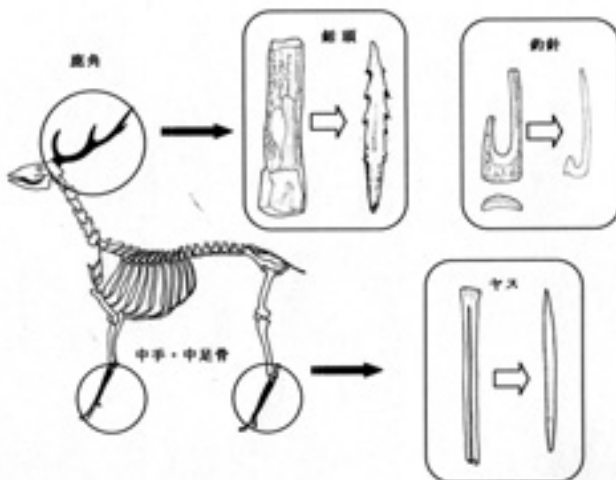
ここでは今回の調査で判明した余山貝塚の骨角貝器群の全体構成や、器種のなかでも主体を占めている骨角製漁撈具についての所見をまとめておく。残念ながら本コレクションは記録が乏しいため骨角貝器の正確な帰属時期については判定できない。しかし同じ発掘で発見され収蔵されている同遺跡出土土器を参考とするならば、これらの骨角貝器群は後期中葉から後葉の加曾利B式期から安行1式期にかけてのものと推測することができる。

また近接地域を調査した東京大学人類学教室の酒詰仲男の所見〔酒詰 1963〕では後期中葉の住居址とその周辺より大量の骨角器、貝輪などが出土している点から見ても総合的である。

1. 素材部位からみた骨角器生産

これらの骨角器の中でも、数的な主体を占めるものは夥しい数の漁撈具である。高島が歯科医師であり、動物の骨格に詳しい知識があったせいも、骨角器は小破片にいたるまで、くまなく採集したらしい。そのためか簞や釣針の小破片は多数に上る。こうした状況から一定程度の資料の散逸は考えられるものの、余山貝塚に残された骨角器群の本来の組成をある程度反映しているものと考えられることができる。

それらの内訳は銚頭 37 点、簞 592 点、釣針 103 点となり、突き獵を主体とした漁撈活動が盛んに行われたことを示している。簞と銚は先端部が離頭するか否かによって区分する考え方や、大型のものを銚と呼び、小型品を簞とするなど諸説があるが、定見がない。ここでは余山貝塚の骨角器の説明として伝統的に逆刺があり、基部と器体が区分されている形態のものを慣用的に銚（モリ）と呼び、一端が先端部として成形された棒状の骨角器を簞（ヤス）と呼ぶことにする。なお、余山貝塚の銚については、金子浩昌により形態学的な観点から離頭銚と想定する見解が示されている〔金子 1959〕。



第1図 シカの骨格と骨角器の素材部位

銚頭と釣針は例外なく鹿角を素材としており、これに対して簞はシカの中手・中足骨である。つまり、主要な漁撈具はシカの骨角を素材としており、器種と素材部位の関係が明確に区分できる（第1図）。

今日に至るまで余山貝塚の動物遺存体の定量分析のデータの正式な報告はない。植月は1959年に大場磐雄を団長とした台地上の大規模調査によって出土した動物遺存体を分析し、哺乳動物ではシカが主体となりイノシシが少ないことを指摘し

ている [植月 2013]。後期中葉から後葉を中心とした時期の状況であるが、それは想定されてきた骨角器の時期と対応しており、これを参考にするならば、骨角器の素材と調和的である。

しかし、膨大な出土数をもつ籜は中手・中足骨という限られた部位を利用し、しかも1本の素材から4本が製作されたと仮定した場合、シカの個体数と整合するかは不明であり、遺跡外からの素材の持ち込みも想定する必要もあるかもしれない。現時点においてそのことを具体的に検証することはできないが、余山貝塚の人々にとってシカは漁撈具生産の素材として計画的に利用されていたことは明らかであろう。

2. 残存部位の比率と特徴

その中でも銚頭は37点があるが、図示した個体の大半は器体の上半部の遺存した資料であった。未掲載の資料中には器体の主要部を欠損した基部のみのものがあり、全体数からすれば決して少なくはない数である。折損断面は風化面を形成しているため、これらが発掘後に破損したとは考えられない。このことは銚頭の利用方法ともかかわるであろうが、先端部を中心とした器体は何らかの力学的な作用により基部から折損したことを示唆する。

完形の銚頭と基部のみの資料を比較すると、基部の残存部位が互いによく似ていることがわかる。おそらく対象物に貫入した銚が柄部との間で欠損したことを示しているのであろう。基部が遺跡内に残存するのはこの推測と矛盾しない。もし、この推定が正しければ、金子が指摘した離頭銚としての機能は考えにくいものとなる。柄から離頭した銚先が捕獲対象物の体内に貫入した場合、基部から折損するとは考えにくいからである。器体の断面形態が素材の鹿角の断面形を反映して半円形を成すのに対して、基部断面が円形に成形されているのは、舌状の基部を柄の先端に設けられた孔に差し込んで固定するためのものであったと考えると矛盾しない。

基部と体部との間の突起は縄などで銚頭と柄とを緊縛して固定するためのものであったに違いない。

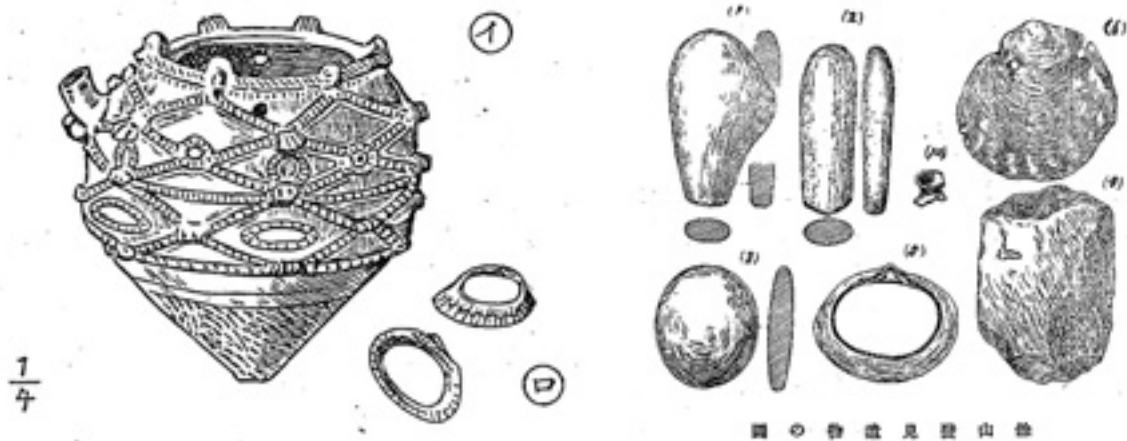
最も出土数の多い、籜の遺存部位は中間部のみの資料を除外し、先端部側と基部側に区分してその比率を検討すると、先端部側が20%に対して基部側が80%となり、基部側が圧倒的に多いことがわかった。この事実は銚頭と同様にして、獲物に貫入した先端部は柄とは別に扱われたか、または器体の折損によって対象物の獲得に至らなかったことを示すのかもしれない。

3. 余山貝塚と貝輪研究

(1) 江見水蔭発見の小形貝輪

出土遺物から余山貝塚を特徴づけるもう1つの遺物は貝輪である。その出土量は膨大であり、下郷コレクションの中にも大量の貝輪類が存在する。しかし、これらの大半には注記が施されていないため、今回は扱わなかったが、それらがベンケイガイとサトウガイを素材としている点からみて余山貝塚出土のものと考えて良いだろう。

余山貝塚の貝輪の最大の特徴は、その大半が未成品または製作途上での破損品であるということである。この事実は本遺跡の貝輪生産における拠点性を示唆している。またその一方で、余山貝塚から発見された人骨で貝輪を着装した事例はわずか2例に限られており、膨大な量の貝輪完成品の多くは余山貝塚から他の遺跡に搬出されたことを示している。この事実は未成品を残す釣針や銚頭とは大きくことなる点である。本報告では上記のような理由から貝輪の具体的な資料の提示は行っていないが、余山貝塚における貝輪研究の意義について学史的な検討を加える。



第2図 余山貝塚発見の小形貝輪 [江見 1909] と石器類 [大野 1925]

江見水蔭は余山貝塚の発掘記を自著 [江見 1909] のなかで紹介し、完形で逆位の状態で出土した安行2式の注口土器の中から20個の小形の貝輪が発見された事実を紹介し、その大きさが腕輪に使用し得ない程小形のものであることから、腕輪ではなく漁撈具と考えた(第2図左) [江見前掲]。当時はまだ人骨が腕に装着した状態での発掘事例がなかったため、貝輪の用途を巡る議論は大野の装飾品説と江見の漁撈具説が併存していたのである。

この問題は後年になり小児骨にも貝輪が装着される事例が発見され、装着年齢が成人だけではなかったことが明らかになった。江見発見の余山の貝輪はその後長いあいだ所在が不明となっていたが、東京国立博物館の収蔵資料中にあることが金子浩昌によって実測図とともに紹介され、ふたたび検討が可能になったことの意義は大きい [金子 2009]。余山の小形貝輪をみると、それがすべて完成品であることがわかる。江見の貝輪はこれまで発見された余山貝塚の貝輪が、多くが未成品であったのに対して、成品が保管されていた稀有な事例となる。さらにこれらが子供の貝輪であるならば、余山貝塚では子供から大人にいたるまでの多世代にわたる貝輪を生産していた可能性が高くなる。膨大な貝輪未成品のサイズの計測が将来的にはこの推測の検証を可能としてくれるであろう。

(2) 貝輪の製作技術における大野雲外の着眼

余山貝塚の貝輪生産を考える際に学史的にも注目されるのは、大野雲外(延太郎)による余山貝塚資料の記載である(第2図右) [大野 1925]。大野は余山貝塚の出土品を紹介するなかで、「図に示す如き(1)(2)(3)(4)は此れ貝輪を製造するときに使用したものであらう・・・中略・・・これらは貝の内面から打ち砕くためならんと考へられる」 [大野前掲] と説明し、大量に出土した貝輪の製作方法について検討を加えた。これらは短文ではあるが遺跡から採集された遺物を相互に関連づけて具体的に貝輪製作の方法について解説を加えた初期のものであろう。近年では貝輪の製作方法に関する研究も見られるが、その多くは研磨段階での砥石の利用を除いては貝輪自体の加工度などの観察から製作工程の復元したもので、加工具との対応関係を配視した事例研究は現在でもなお少ない。

余山貝塚からは多種多様な砥石や敲き石の出土があるが [石橋 2000]、それらが具体的に何を加工するためにどのように使われたのかということは、全くと言ってよいほど研究は深化していない。従来より礫器や先端に使用痕を残すハンマーが多数出土しており(第2図右・写真1左)、また定形的な石器ではないため、一見すると石器とは認定できない大小の使用面のある砂岩片なども多数存在



写真1 余山貝塚出土の石器と犬吠崎周辺の岩石の産状

し、これらの在り方は後晩期の集落遺跡の石器群とは大きく異なっている。

したがって当然、これらの石器が骨角器や貝輪の大量生産とかかわる可能性が指摘できるが、改めてこれらの石器の用途について製作技術との関係を検討しなければならない。

また、これらの石器石材は砂岩や古銅輝色安山岩などを素材としており、その産地は銚子犬吠崎周辺に求められる [田村他 2004]。貝輪素材とされたベンケイガイやサトウガイが外洋性の貝類であることや、古生層が隆起してできた犬吠崎という石材産地を擁している点も余山貝塚の資源環境上での特質といえる。

【引用・参考文献】

- 阿部芳郎 2007 「内陸地域における貝輪生産とその意味」『考古学集刊』第3号
阿部芳郎 2013 「余山貝塚の貝輪生産と地域社会」『陸平と上高津』研究成果シンポジウム予稿集
石橋宏克他 1991 『銚子市余山貝塚発掘調査報告書』(財)千葉県文化財センター
石橋宏克 2000 「余山貝塚」『千葉県の歴史 資料編 考古1 (旧石器・縄文時代)』, 千葉県; pp.836-843
江見水蔭 1909 『探検実記 地中の秘密』, 博文館
大野延太郎 1925 「下総余山発見の遺物について」『古代日本遺物遺跡の研究』, 磯部甲陽堂
金子浩昌 1959 「石器時代の漁撈活動」『千葉県石器時代遺跡地名表』千葉県教育委員会
金子浩昌 2009 「古鬼怒川下流域縄文時代貝塚資料にみる貝輪の研究」『骨角器集成』, 東京国立博物館
金子浩昌・忍沢成視 1986 『骨角器の研究 縄文篇 I・II』, 慶友社
川崎純徳 1979 「4縄文時代の生業(3)製塩」『茨城県史料 考古 資料編』茨城県
酒詰伸男 1963 「千葉県銚子市余山貝塚発掘調査概報(中篇)」『文化学年報』第12輯, 同志社大学文化学会; pp.125-145
田村隆・国武貞克・吉野真如 2004 「旧石器時代石器石材写真集」『千葉県の歴史』資料編考古4
銚子市教育委員会 2001 『銚子市余山貝塚調査概要』～昭和34年1月大場磐雄国学院大学教授の発掘調査概要～
銚子市教育委員会他編 2005 『不特定遺跡発掘調査報告書—余山貝塚IV—』, 銚子市教育委員会